

Title	中国古代における「謡」の思想史的研究
Author(s)	串田, 久治
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3144182
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	串田久治
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第13546号
学位授与年月日	平成10年2月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	中国古代における「謠」の思想史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 加地 伸行 (副査) 教授 福島 吉彦 助教授 湯浅 邦弘

論文内容の要旨

「謠」とは、中国古代、伴奏なくしてうたう歌を意味し、当時の人が児童や庶民などが作りうたった形にして、政治・社会への不満や批判を表明したものであった。従来、中国でも日本でも、「謠」は文学史において取り上げられるものの、五言詩・七言詩の先駆的表現とする形式論的な研究だけに終わってきた場合が多い。しかも、「謠」の内容は、荒唐無稽であるとして、概して思想史の研究からは取り上げられることがなかった。

本論文は、漢代を中心にして、個々の「謠」を膨大な史料と照合しながら分析し、「謠」の持つ意味や性格を検討し、その予言的性格を解明し、「謠」が単に当時の社会の状況を反映しているだけの産物ではなく、漢代の災異思想・讖緯思想等を基盤とし、あるいはそれらと関わりつつ、時に政権を覆す原動力となり、現実の政治・社会を動かそうとした思想的表現であったことを明らかにして、「謠」を、中国思想史上に位置づけんとする初めての試みである。

全体は、「『謠』とは何か」「前漢初期の『歌』とその予言性」「前漢の『謠』と『予言』」「後漢の『謠』と『予言』」「童謠』と熒惑」「中国古代の予言」の全六章から成る。分量は、400字詰め原稿用紙に換算して、約720枚である。

第一章「『謠』とは何か」においては、まず「謠」に関する研究史を整理し、従来の研究が、比較的早くから「謠」(特に「童謠」)に注目しながらも、単に「謠」の存在を表層的に指摘するだけで、個々の「謠」に対する入念な検討を行っていないことを明らかにする。次に、「謠」の起源と定義とについて、『列子』『国語』『左伝』などの記載を手がかりに、「謠」が周代には既に存在し、「童謠」「民謠」「百姓謠」などとも呼ばれていたこと、誰が作ったのかを特定できない点に最大の特色を有すること、時の統治者に大きな批判を加えたこと、「謠」を作りうたう者も社会に与えるその影響力を知悉していたこと、などの特色を指摘している。

また、「謠」の歴史的展開を四段階に分別している。即ち(1)災異説以前の「謠」—災異説以前の原始天人相関思想の「謠」、(2)災異説の影響下の「謠」—原始的な「予言」と災異説とが結合した「謠」、(3)讖緯説隆盛期の「謠」—「謠」の最盛期、(4)熒惑(火星)と結合した「謠」—神託としての「謠」、の四類であり、それらを時代に比定すれば、(1)は前漢の武帝まで、(2)は昭帝から元帝、(3)は前漢の成帝から後漢、(4)は魏晋以降になる、とする。以下の各章は、ほぼこうした区分に沿って論述されている。

第二章「前漢初期の『歌』とその予言性」では、「謠」の先駆としての「歌」を取り上げ、史実と照合しながら、その「予言」的性格について検討を加えている。論者は、前漢の「謠」が災異応徴的内容によって政権批判を始める元帝期に先立ち、既に前漢初期にも、その先駆としての「歌」が存在したことを明らかにしている。具体的な例として、呂太后に対する暗喩・風刺である朱虚侯劉章の「耕田の歌」、武安侯田蚡の野心と陰謀とを告発することによって間接的に武帝を諷する「淮南民歌」と「潁川兒歌」となどを分析し、それらが予言的内容をうたう「謠」の先駆の意味を持っていたことを指摘している。さらに、朱虚侯劉章の「耕田の歌」について、司馬遷はそれらが何かの「予言」であるとは明言しないものの、班固は、それらを災異思想によって解釈し、呂太后の死や一族の滅亡も、それ以前に起きた数々の災異にその予兆が見られると明言していて、これらの「歌」がやはり「予言」性を持った「詩妖」の先駆として位置づけられていること、を指摘している。

第三章「前漢の『謠』と『予言』」では、前漢時代の「歌」「謠」が、災異説（人君が天の意志に反する行為を犯せば、天はまず「災」を下して譴責し、それでも人君が失政を改めず背徳を続ければ、次に「異」を下して威嚇し、それでも悔い改めることがない場合、天はついにその国を滅ぼす、という天人相関説）と結合しながら、その予言性を強めていく過程について論述している。即ち、前漢時代に、昌邑王劉賀（廢帝）の廢位と宣帝の即位とを言い当てたとして著名な眭弘と夏侯勝との「予言」を、漢代に生まれた「予言」の顕著な例として取り上げ、それが災異説を政治に取りこんだ「予言」の最初のものであり、またそれが、前章で検討した前漢初期の「歌」と、成帝期から前漢末期にかけて次々と生まれる「謠」との間隙を埋める「予言」として位置づけられることを指摘する。

さらに、元帝期の「謠」には、災異を天の譴責と見なす災異説本来の傾向が強く、予言性はなお希薄であること、これに対して成帝期の「謠」には、王莽の活躍を期待して新しい時代の到来を「予言」する性格が窺え、ここに「謠」の性格の変化が看取しうること、などが論じられている。

第四章「後漢の『謠』と『予言』」では、こうした「謠」の性格の変化について、後漢期の「謠」にさらに多面的な検討を加えている。即ち、順帝期の「謠」（胡広を批判し、次の桓帝期の混乱を予言したもの）、桓帝期の「謠」（梁氏一族の専横を批判し、その滅亡を予言したもの、および、桓帝の最期を予言したもの）、党錮の禍をめぐる「謠」（宦官の専横という状況を改善するものとして、竇武への期待をうたったもの）、後漢末期の「謠」（靈帝の即位を予言したもの、および後漢王朝の滅亡を予言したもの、さらには董卓などの群雄を批判したもの）を個別に分析し、後漢時代の「謠」が社会や政権への批判の武器として定着していったこと、さらに言葉遊びの要素が加わるなど表現効果を高めた「謠」が登場すること、などが指摘されている。

第五章「『童謠』と災惑」では、「謠」が災惑と結合して変質していった過程が論じられる。即ち、災惑はその（見かけ上の）不規則な運動から、反乱・戦争・飢饉・疾病などと関わる不吉な惑星であると見なされていたこと、また後漢時代に入り、災惑の神秘化が進み、その「予言」性が強く意識されるようになったこと、一方、「予言」的傾向を強めていた「（童）謠」は、災惑から舞い降りた童兒が天の声をうたったものと意識されるようになり、その神秘性をさらに強めていったこと、などが解明されている。続いて、三国時代以降の「謠」について、『晋書』五行志に「童謠」が「詩妖」として大量に記録されることなどを指摘し、それは災惑が原因となって生じた「妖」が「童謠」であるとの意識が定着した結果であると考察している。

こうした分析を経て、第六章「中国古代の予言」では、中国古代の「予言」全体へと視野を拡大し、その特質について論じ、本論文のまとめとする。具体的には、まず、鳳凰・麒麟・龍などの祥獣、美しい雲や星の出現などを祥瑞として特別な意味づけをした中国古来の祥瑞思想を取り上げ、それらが来たるべき輝かしい未来を告げる「予言」的意味を持つと理解されてきたこと、また、それが漢代の災異思想と表裏の関係にあることを指摘する。ただし、「謠」は、本来、人々の政治的・社会的な願望であり、その願望が実現された時には予言として評価され、実現されない時には消えていく点を追跡している。

次に、秦の滅亡や始皇帝の死を予言した「亡秦者胡也」「始皇帝死而地分」「今年祖龍死」などの文が含む暗喩の分析を通して、中国古代の「予言」が、「謠」「歌」「語」という形式の如何を問わず、社会や政治に対する不満や批判を含んで、現実社会の改善・改革を積極的に求めるという意図を有していたこと、また、儒教的知識人が儒教的教養に

基づいて表現する方法とは異なった表現方法として定着していったこと、単なる個人的次元の批判・希望にとどまらず、政治的・社会的性格を帯びるに至ったことを組織的に論じている。そして、「謠」などの諸作品が、実は知識人の手による作である可能性をも検証している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来、中国文学史研究において簡略に取り上げられるに過ぎなかった「謠」を、中国古代思想史という観点から初めて本格的に取り上げた。本論文の意義は、まず、こうした資料を取り上げる斬新な問題意識にあると言えよう。

本研究の分析方法について言えば、論者は、「謠」を表層的に捉えるのではなくて、個々の「謠」を、その対象と目される事件や人物を中心とした史実と逐一照合しながら、その社会的意味を具体的に解明しようとしている。この点は、「謠」という捉えがたい漠然とした資料について着実な解析を行ったものと高く評価できる。なお、その照合は膨大な資料操作によってなすとげられており、その丹念な作業に論者の並々ならぬエネルギーの集中を見ることができるといえる。

次に、本論文が目指した思想史上における「謠」の位置づけについても、論者は、漢代思想史の根幹をなす災異説、讖緯説などの神秘思想と「謠」との関係性を明らかにし、「謠」を、漢代の政治思想の上に明快に位置づけることに成功している。今日の漢代思想史研究は、いわゆる思想的資料の解釈のみでは行き詰まりを見せており、今後、思想家の言説のみではなく、これら「謠」を含む当時の社会を表現する諸資料の分析を行う必要が生じてきていることを示したと言えよう。

また、論者は、「謠」が社会的に強い影響力を持ち、当時の政治の一つの基準、価値評価として機能していたことを明らかにしている。そして、そこから逆に、王莽に対する一定の新しい評価を導いている点も注目される。即ち、従来、王莽は漢王朝の篡奪者であると酷評されてきたが、論者は、王莽を非難中傷する「謠」が記録されていないことから、王莽が当時の社会からそれなりに期待を持って受け入れられていたのではないかとする大胆な仮説を提示する。中国古代の政治家や政治状況に対する評価は、しばしば後世の歪曲を経ている場合があるので、「謠」に基づくこうした分析の方法を転用するならば、今後、王莽以外の人物や政治状況の研究においても新たな視点が生まれるのではないかと期待される。

さらに、本論文は、こうした「謠」の分析を通じて、最終的には、中国古代の「予言」全体の問題へと視野を広げ、「予言」の持つ社会的機能を明らかにし、災異思想・讖緯思想などいわゆる神秘思想が、むしろ当時の人々が受け入れていた現実的な思考方法であったことを指摘している。この点は、神秘思想を特殊なものとして評価を与えてこなかった従来の中国思想史研究全体に対して、重要な提言になっていると言えよう。

もっとも、本論文は、「謠」と史実との照合のために、膨大な資料を引用して検討するあまり、類例を並列するに過ぎる憾みもある。もっと類型化・典型化して一定のモデルを体系的に抽出すれば、その論はさらに深まり、かつ相互関係が理解しやすくなるであろう。また、中国の韻文の句型・押韻の表現形態に対照し、「謠」の多くが取る韻文形式について、そのリズムや押韻の効果や形態上の問題について検討が望まれる。

また、王莽評価については、斬新な仮説ではあるが、「謠」のみによって判断するのは、必ずしも充分とは言えない。王莽については、なお多面的な検討を加えることが必要であり、そのためには、王莽研究という別の大きな主題の研究にならざるを得ず、本論文の領域を越えることになる。ただ、本論文の王莽評価は、王莽研究に一石を投ずることになるであろう。

なお、平成10年1月13日（火）に実施した所定の学力確認試験に、本申請者は合格した。

本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分に値すると認定する。